

# 教区だより

2021  
12月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第387号

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。これまで「当たり前」にしてきたことが当たり前ではなくなった現実直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このよくな時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身ををさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思えます。



## 私を照らす 月の光は 千年先も 照らす

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

### 目次

1頁 「ことば」

2頁 **連載** 悲しみが通じあう時 ―愚禿悲歎述懐を通して―

《第8回》 よつつし 四衢 あきら 亮氏

3頁 「教区教化委員会・教化推進本部 発足式報告」

4頁 教務所からのお知らせ



京都教区駐在教導

わたなべ 渡邊

あきら 晃



五濁増のしるしには

この世の道俗ことごとく

外儀は仏教のすがたにて

内心外道を帰敬せり (聖典五〇九頁)

これまでの「愚禿悲歎述懐」は、自身の内心や姿勢のあり様が、真宗の教えによって明らかにされると同時に、その教えの確かさが詠われる和讃でした。この和讃からは、親鸞聖人を見つめられていた時代の仏教のあり様が、教えに照らし出される内容となります。

五濁増の「五濁」は、劫濁Ⅱ世の中、人間の社会が濁り汚れること。見濁Ⅱ邪な見方や考え方が及び

こる。煩惱濁Ⅱ自分の名利と物欲が最優先される。衆生濁Ⅱ人間性が損なわれ、刺々しい関わりになる。命濁Ⅱ歴史を顧みず利那的になる。という五つの濁りです。その濁りが増大しているしるしがあると詠い込まれます。

「しるし」という言葉は、親鸞聖人のお手紙には「世をいとうしるし」などと使われますし、『教行信証』では「後序」に「決定往生の徴」と述べられ、あかし、きざしという意味で使われます。ですから五濁が増大している証拠に、あるいはいよいよ五濁が増大していく兆しとして、今の時代を生きる出家者も在家者もみな、外の形は仏教であるけれど、内心は仏教から離れていると詠われているのです。

仏教を名のり標ぼうしながら、時代をあげて仏教ではないものとなり、さらにそのことが全く問題にならないとはどういうことでしょうか。

劫濁は、戦争など人間の争いや欲望が世を覆う出来事や自然が猛威を振るう天災などによる、社会全体の濁りです。天災もそれをきっかけに人間の問題が噴出します。現在の新型コロナウイルス感染症拡大は、世界全体の協力が何より大切なのに、医療体制やワクチン接種を巡っては、力のない国や弱い立場の人を置き去りにする人の世の姿を露わにしました。

私たちは、経済力や軍事力などによってその国を

軽く見たり無視するようになります。あるいは強大な力を持つ国にはおもねり、尊重します。そうした「力」で比べ評価する価値観が私たちのものの見方となっていないでしょうか。

ですから効率よく生産性を上げる人やより多くの利潤を追求できる人は評価されますが、それができなかつたり、できなくなった人には差別したり排除する視線が作られることになります。その視線が障がいを持つ人や老人に厳しく向けられます。それで老いたり病んだりすれば生きづらさを感じますし、こども達にも後れを取らないよう評価される学力・学歴を目指せと叱咤するような雰囲気を作られます。そしてそこにある辛さや悲しみ・苦悩が顧みられることはありません。

それは、『無量寿経』が下巻の五悪段で「強劣伏弱」と語るあり様です。強い者が力でねじ伏せて世が作られるのです。そして弱い者は、その力の前に片隅で身を縮めて生きることになります。まさに当時の仏教が、力あるものの仏教となり、その力におもねり、力に仕えることで、力のない人々を「下類」として仏教の救いから遠ざけるものとなっていたのです。その姿と問題を深い悲しみをもって見つめて述べられます。

教区教化委員会・教化推進本部 発足式

報告

出版部会主査 比叡谷 真  
ひえたに まこと

去る九月二十九日、教区教化委員会・教化推進本部発足式が、オンラインにて開催されました。教区教化における様々な問題をうけて教化委員会規則が改正され、今年度から新教化体制が発足するにあたり、新たに開催されたものです。日野隆文教区教化委員長の挨拶、沙加戸崇教化推進本部長の所信表明により新体制の願いを確かめたうえで、楠信生教区学研究所長から基調講義をいただきました。



楠教学研究所長 講義



日野教化委員長 挨拶



班別報告(1班 井本教化委員)



沙加戸本部長 所信表明

基調講義をうけて、班別座談の時間をもちました。終了後、全体会として各班の報告があり、引き続きまとめ講義として、楠師は、各班で出た論点について、丁寧に応答してくださいました。

班別座談に関しては、今回が初顔合わせのため、自己紹介や今後の運営についての話題に終始し、講義内容から離れてしまったという声が多く聞かれました。しかし、新体制は始まったばかりです。基調講義の中に「会議そのものが同朋会運動であってほしい」というお言葉がありました。今後、教化推進本部、さらには教化委員会や教区内のあらゆる会議が、教えと人に遇う座談の場としてひらかれ続け、楠師が提起された教化の課題にかえり続けていくことが願われます。

最後に、長紀子副本部長・谷本修駐在教導の挨拶がありました。翌日をもって退職された谷本さんの置き土産ともいえる発足式は、これからの教化委員会・教化推進本部にとって、絶えずかえることのできる出発点です。「設立の願いに立ち返る姿勢が、教化本部を生かし続ける」という楠師のお言葉を憶念しつつ、歩み出したいと思えます。



長副本部長 閉会挨拶



谷本前駐在教導 挨拶

【基調講義】「浄土真宗の教化とは」

どの教区も、教化について抱える課題は共通していることを感じる。私自身、北海道教区の教化に二十七歳から関わり、同じ悩みを抱えつつ歩んできた。絶えず輪の広がりを求め、仏法に対する自身の姿勢を問いかえしてくれる仲間、自らの思いこみに気づかせてくれる朋との出遇いを大切に歩んでもらいたい。

教化とは教導感化・教導化益の意、衆生を導く仏のはたらきであると経典に説かれる。あらゆる人々が、仏の世界・仏の道に出遇ってほしいということが教化活動の要の願い。人間の価値観をひっくりかえす仏の教えを、聞き難いものをもって私のあり方そのものが問われることが根本にある。

私たちがかたちづくるものは、限りなく化身土だが、化身土がなければ、真仏土はひらかれない。私たちの大切さ、化仏・化身土の恩徳ということがある。

自信教人信とは、自らが本願念仏の教えに出遇った感動を丁寧に伝えるところに、おのずから教法が人に伝わっていくこと。それは、如来の加威力があつてはじめて成立する。大悲によって私たちがどこまでも感化され続けることが仏恩を報ずることになる。知恩報徳とは、念仏の功德を報ずることであるとうけとめたい。

自らが教えと出遇い、教化への熱い思いをもつ一方で、自身のあやうさを問われ続けながら、朋同行を求める歩みがひらかれることを念ずる。(大意)

## 教務所からのお知らせ

### 《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第四組 重願寺前任職 北脇 正也

二〇二二年十月二十五日 九十四歳

近江第六組 空善寺住職 北村 誓

二〇二二年十月十九日 八十九歳

近江第七組 善休寺前坊守 藤野 千恵

二〇二二年九月三十日 九十四歳

〔敬称略〕

### 《年末・年始の事務休暇について》

年末・年始事務休暇として、左記の期間は教務所事務の取り扱いを休止します。

緊急（期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等は緊急に含みません）の場合日は、左記緊急連絡先までご連絡いただきますようお願いいたします。

#### 〔事務休暇の期間〕

二〇二二年十二月二十八日（火）より

二〇二三年 一月 五日（水）まで

〔緊急連絡先（教務所携帯電話）〕

〇九〇一三七一九一七九八二

## イマダカラ

この度10月1日、京都教区駐在教導に着任しました渡邊晃と申します。以前は本山同朋会館の補導としてお勤めさせていただいていました。出身は岡崎教区（愛知県豊田市）です。

その郷里のご門徒の話になりますが、よくお寺にお参りに来られるおばあちゃんがおられました。そのおばあちゃんには子どもの頃からお世話になっていました。口にされることは、「有り難いことです」「ごめんさい」「すみません」「もったいない」「ごたいげさます」「なんまんだぶつ」、これくらいの言葉しか聞いたことがないくらいのおばあちゃんでした。そのおばあちゃんがお亡くなりになられたこととお聞きし、最近お参りに行かせていただくことができました。その折に、ご家族から色々なお話を聞かせていただくことができました。

おばあちゃんは「仏法聴聞のあいだに田畑をするんだよ、仏法聴聞が私の仕事なんだよ、如来さんからのお仕事もらってる」とおっしゃっておられたそうです。

私の場合は、仕事の合間を縫って、時間を作って仏法聴聞するという考え方になってしまいます。私とは反対です。また生前父が「仕事は、事に仕えることなんだ」と申していました。

京都教務所で皆さんに教わりながら、右往左往しながら勤務して一か月になります。

初めての教務所でのお仕事、大事なお役目をいただいていることに自覚を持って「事に仕え、仏法聴聞」を大切にしていきたいと思います。これからどうぞよろしくお願い申し上げます。

（京都教区駐在教導 渡邊 晃）

## 編集後記 the editor's note

11月末に「子ども報恩講」をお勤めする。親子3～4組の小さな報恩講。今年で3回目になる（去年はコロナで中止）。数年前に、連れ合いの友人・知人を中心に「寺カフェ」という名の茶話会が始まり、その流れで子ども報恩講もやろう、ということになった。広く呼び掛けて子ども会を結成するとか、大きな行事に取り組む、となると大変そうだが、今の「寺カフェ」は来れる人だけ集まって、気軽に意見も出し合えるアットホームな雰囲気なのがある。気負う必要もなく、子ども報恩講も無理なく続けられている。

報恩講の式次第は「かねがなる、すわる、おはなをそなえる、おつとめ、おはなし、おしよくじ、あそぶ」。大体こんな感じ。「あそぶ」は自由時間。前回は、かくれんぼに始まり、鬼ごっこ、最後は何故か「子どもたちがお坊さんから逃げる」というハードな内容だった。

実は十日ほど前から腰を痛めている。歩けなくなるような重症ではないが、走れない。聞くところによると、あるお子さんは今年も逃げる気満々らしい。はたして腰は持ちこたえてくれるだろうか。

（出版部会 藤野 顕生）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第381号

発行人 日野 隆文（真宗大谷派京都教務所長）

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2021（令和3）年12月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

